

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792432

研究課題名(和文) 治療を経験した乳がん患者のレジリエンスを支える看護モデルの構築

研究課題名(英文) The process of resilience of the female patients who breast cancer was diagnosed for the first time and underwent surgery

研究代表者

末田 朋美(高取朋美)(Sueda, Tomomi)

岡山大学・保健学研究科・助教

研究者番号：90553983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：はじめて乳がんと診断された女性を対象に、乳がん罹患したことやその治療によって引き起こされる苦痛や日常生活における困難をどのように受け止め、対処し、適応に向かったかを調査することで、困難な出来事に対処し適応する過程であるレジリエンスを明らかにする取り組みを行った。合計11人の女性乳がん患者に対して1年間、計4回(1名は研究協力者の都合により3回)のインタビューを2014年9月まで行い、データを分析している。

研究成果の概要(英文)：I interviewed primary breast cancer women who underwent surgery to clarify resilience which was the process that they went to the adaptation in the face of adversity. I investigated what they thought about distress and difficulty caused by the treatment in the daily life, and how they coped with them to adapt themselves. 11 breast cancer patients participated in this study. I interviewed for one participant four times (as for one person three times) in one year. The investigation continued until September, 2014 and analyzed data.

研究分野：がん看護

キーワード：乳がん resilience がん看護 適応 手術

1. 研究開始当初の背景

日本人女性の乳がんの年齢階級別罹患率の推移をみると罹患患者数は年々増加し続け、日本人女性の16人に1人が乳がん罹患するといわれている(がんの統計'10, 2011)。しかし、乳がんの5年相対生存率は80%を超えており(がんの統計'10, 2011)、他の部位に発生するがんと比較すると適切な治療により長期生存が可能であるといえる。乳がん罹患率が上昇する30歳代から罹患率のピークを迎える50歳代の女性は家庭においても社会においても重要な役割を担う年代であり、我が国におけるピンクリボン運動に象徴されるように乳がんに対する社会的関心は高まっている。

乳がんの手術は比較的侵襲が少ないため、入院期間は短期間である。さらに、近年の保健医療制度の転換により入院期間がより短縮され、外来での治療の継続が中心となっている。そのため、入院期間の短縮に伴い、乳がん患者に対する看護師やその他の医療者の直接的介入の機会は減少し、乳がん患者は外来で行われる治療やそれに伴う生活への影響を受けながら、家庭や社会においても重要な役割を果たすうえで直面する困難や不安を自分の力で解決していかなければならないという課題に直面する。しかし、乳がん患者が乳房の喪失感や再発、転移などの不安とともに自己の価値観の再構築を見出しているという報告(上田, 2002)もあり、乳がん患者は、乳がん罹患とその治療に関する困難な体験を乗り越えて適応に向かう力を備えていると考えられる。

人が逆境にもかかわらず精神的健康や社会的適応行動を維持、回復することを説明する概念にレジリエンスがある。1980年頃から心理学分野で発展した概念で、レジリエンスに関する研究は、幼児・小児を中心に行われてきたが、近年では、精神的回復力や社会的適応を説明する概念として、心理学分野だけではなく精神病理学、看護学分野などで年代や発達課題にかかわらず適応を説明する概念として広く用いられるようになっていく。レジリエンスは「リスクの存在や逆境にもかかわらず、よい社会適応をすること」という意味で用いられるが、Lutharら(2000)は「ある不幸な出来事の背景にある肯定的な適応を方向づける動的な過程」としてより明確に、レジリエンスが過程であると定義しており、その重要性を強調している。

保健医療上のレジリエンスという概念の重要性は認められているものの、多くの書籍や論文でレジリエンスの概念や定義が様々に論じられており、レジリエンスの定義自体が曖昧であり現時点でレジリエンス研究は発展途上にあるといえる。庄司(2009)は、レジリエンスは「リスクや逆境にもかかわらず、よい社会的適応をすること」という意味であり、レジリエンスを定義する「リスク」あるいは「逆境」と「よい社会適応」という

2つの要素が必要となり、研究においてはこれを明確に、あるいは操作的に定義することが必要となると述べており、概念分析を行うことによってレジリエンスの構成概念を明らかにし、用語の定義をすることは研究を遂行するために不可欠である。

がん看護においてもレジリエンスは患者のQOL(Quality of Life, 以下QOLとする)向上に貢献する概念として関心が高まっている。先行研究において、レジリエンスが乳がん患者のQOLに影響を及ぼすと報告(若崎ら, 2007)があることから、レジリエンス研究によって乳がん患者のQOL向上が期待できるという示唆が得られている。乳がん患者は、治療を経験する中で直面する困難や、生活への影響に自ら対処することで、心理社会的適応を果たしており、レジリエンスを支援する看護は、乳がん患者が自ら回復しようとする姿勢を支える重要な援助であり、乳がん患者を対象にレジリエンスに関する研究を行うことは患者自身がかつ力を引き出し、それを支持するがん医療を推進するという点において保健医療の貢献につながる有用な研究であると考えられる。また、レジリエンスは、適応を説明する概念として看護学分野でも注目されている概念であるが、我が国でのレジリエンス研究は、質問紙による横断的研究がほとんどであり、介入研究や縦断的研究は行われていない。適応という動的な過程を説明する概念であるレジリエンスを明らかにするためには縦断的研究によってその過程を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

(1) 心理社会的適応を説明する「レジリエンス」の概念分析を行い、レジリエンスの構成概念の明確化と類似概念を識別することによって、がん患者のレジリエンスを定義する。

(2) (1)で定義した乳がん患者のレジリエンスの構造を明らかにするため、乳がん患者の心理社会的な適応過程を縦断的に調査して質的帰納的に分析することで、乳がん患者の心理社会的適応を支える看護実践モデルを構築する。

3. 研究の方法

(1) 概念分析の手法は、Walker & Avantの手法を用いた。Walker & Avantは、概念分析がその概念のその時点でのきわめて重要な要素を捉えることができる方法であり、ある概念を説明するとき、類似しているが同一ではない他の概念とその概念を区別することで、概念間の類似と相違を区別すると述べており、類似概念との区別を明確に行うことを強調していることに手法の特徴があるといえる。したがって、「がん患者のレジリエンス」の定義を明らかにし、いまだ明らかにされていないレジリエンスの類似概念との区別を明確にするためにはWalker & Avant

の手法が適切であると考えた。Walker & Avant の手法を用いて「がん患者のレジリエンス」の概念分析を行った。

(2)乳がん患者が、治療を経験する中で起こる困難や日常生活への影響に対処することで心理社会的に適応していく過程を、面接ガイドによる半構造化面接法を用いて縦断的に調査し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析することで、乳がん患者におけるレジリエンスの構造を明らかにする。理論を生成によって得た看護への示唆をもとに乳がん患者のレジリエンスを支える看護実践モデルを構築する。

4. 研究成果

(1) データベースとして医中誌 web, CINAHL(Cumulative Index to Nursing and Allied Health Literature), MEDLINE (MEDical Literature Analysis and Retrieval System Online), Chocran Library を用い、がん患者のレジリエンスに関連した文献を対象に概念分析を行った。Keyword を「レジリエンス」「がん」「resilience」「cancer」として検索し、147 文献が分析対象文献候補となった。これらの文献のタイトルおよび抄録を読み、がん患者のレジリエンスに関連しそうな文献に絞り込み文献を取り寄せた。さらに取り寄せた文献を精読し、成人がん患者を対象とし、レジリエンスに関する記述が読み取れた文献を分析対象文献とし、最終的に和文献 6 件、英文献 15 件の合計 21 文献を対象とした。

分析によって、【逆境への対処】【内的・外的資源と相互に影響しあう】【身体的・心理的・社会的機能の維持】【ありのままの自己と現実を受け入れ、前向きな展望をもち、生きる意味を見出す】【動的な心理特性】の 6 つの属性が抽出された。先行要件には、レジリエンスが【出現する条件】として、「避けることのできない脅威的な状況」や「社会的に不利な状況」、「がん罹患に関連した苦痛を伴う体験」があり、レジリエンスを【促進させる因子】として、「自己や外的環境に対する肯定感」「他者とのつながり」「内的な強さ」があった。レジリエンスの帰結としては身体的・精神的健康が向上し、社会的 well-being の獲得や「感情的苦痛の減少」、「自己肯定感が高まる」ことを含む【成長】と「がん体験の受容」と「立ち直り」を含む【適応】があると考えられる。

以上より、がん患者レジリエンスの定義を「避けることのできない脅威的な状況や社会的に不利な状況、がん罹患に関連した苦痛を伴う体験という条件下で現れ、自己や外的環境に対する肯定感や他者とのつながりや内的な強さによって促進され、内的資源および外的資源と相互に影響しあう動的な心理特性によって逆境に対処し、身体的・心理的・社会的機能の維持とありのままの自己と現実を受け入れ、前向きな展望をもち、生き

る意味を見いだすことで成長と適応を導く過程」と定義した。類似概念として、coping, sense of coherence (SOC), hardiness, mastery, post traumatic growth (PTG), recovery を比較し識別を試みた。いずれの概念も困難な出来事や状態に曝された状況下で認められる概念で、困難な状況下にある人の反応や指向性、努力あるいは性格的特性として定義されていた。類似概念として比較した 6 つの概念はいずれもレジリエンスと同様の属性を含んでおり、共通する点も多くあるが、まったく同一の概念であるとは言いがたい。レジリエンスの定義を困難な状況に適応する心理的特性として定義した場合、SOC, hardiness, recovery とほぼ同じ概念であるといえるが、適応に向かうプロセスとして捉えた場合、SOC, hardiness, recovery は指向性や性格的特性を説明する概念であるためどのような結果を求めるかという点において異なる。また、Coping, mastery, PTG はそれぞれ帰結においてレジリエンスと異なっている。

(2) 研究協力施設より紹介を受けた初発乳がん患者で初期治療として手術を受けた女性 12 人に研究協力を依頼し、対象者の条件に合致し研究協力が得られた 11 人の女性乳がん患者を対象に半構造化面接を実施した。1 人は協力が得られたものの研究対象の条件を満たさなかったため、研究対象からは除外した。面接は 1 人の研究協力者に対して手術から術後 1 年の期間に 3~4 回行った。具体的な時期は、1 回目：術後 1 ヶ月以内、2 回目：術後 3 ヶ月、3 回目：術後 6 ヶ月、4 回目：術後 1 年で、研究協力者 10 名は 4 回、1 名は研究対象者の都合により 3 回の面接を実施した。面接内容は、①面接時点での治療の状況と身体的状況、それらを自身がどのように捉えているか、②乳がんと診断されてから困難だと感じていることとその対処について、自身がどのように捉えて行動しているか、ということを中心に語っていただいた。

面接内容は研究協力者の許可を得て録音し、書き起こしたものを逐語録として分析データとした。分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法で行い、(1)のがん患者のレジリエンスの定義をもとに、分析焦点者と分析テーマを決定し、データを分析している過程にある。分析結果により乳がん患者のレジリエンスが明らかになることで、乳がん患者のレジリエンスを支える看護への示唆が得られると考える。

〈引用文献〉

Luthar, S.S., Cicchetti, D.. The construct of resilience: Implications for interventions and social policies. *Development and Psychopathology*, 12, 857-885, 2000
Walker, L.O., Avant, K. C. (中木高夫, 川崎修一訳). 看護における理論構築の方法, 2008,

90-91

上田稚代子, 関美奈子, 竹村節子. 乳癌患者の術前・術後の心理状況の分析. 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要, 19-25, 2002
公益財団法人癌研究振興財団. がんの統計' 10, 2011, 16-18

庄司順一. リジリエンスについて. 人間福祉学研究 2(1), 35-47, 2009

若崎淳子, 谷口敏代, 掛橋千賀子, 森將晏(20. 成人期初発乳がん患者の術後の QOL に関わる要因の探索. 日本クリティカルケア看護学会誌, 3(2), 43-55, 2007

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 0 件)

〔学会発表〕 (計 0 件)

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

末田 朋美 (高取朋美) (SUEDA, Tomomi)

岡山大学大学院保健学研究科 助教

研究者番号 : 90553983